

2025 年度 第 4 回北海道レフェリーアカデミー 事業報告

報告者：鈴木辰汰（オホーツク地区）

【日時】 2025 年 6 月 28 日（土） 6 月 29 日（日）

【場所】 札幌第一高等学校グラウンド（試合実践①）、北海高等学校グラウンド（試合実践②、③）（6/28）

札幌市厚別公園陸上競技場サブグラウンド（試合実践④、⑤）（6/28）

札幌市手稲コミュニティセンター多目的ルーム（6/29）

【参加者】 審判員：伊藤唯翔、二谷夢翔、高橋陽斗、鈴木辰汰

インストラクター：古曽部統太郎氏（RAM）、平石暁史氏（RAI）、今川一輔氏（RAI）、岡田渉氏（RAI）

オブザーバー：三上正一郎氏（1 級審判員）

6 月 28 日（土）

8：20 集合

10：00 試合実践① 高円宮杯 U-18 サッカーリーグ 2025 プリンスリーグ北海道

札幌第一高等学校 vs 札幌光星高等学校 主審：伊藤唯翔 担当 INS：今川一輔氏

〈自己分析〉

以前の試合で、レフェリーサイドから見る時間を増やした方が全体を見ることができるとアドバイスをいただいた。昨年の自分も確かにそのように動いていたと思っていた。今年は、無駄なサイドステップやバックステップを減らそうとしていたため、前進するランニングが多くなった。その結果、以前にはレフェリーサイドに行けたところが、行けなくなっていた。この試合では、必要ならサイドステップ、バックステップを多用しようと思い、臨んだ。

その結果、ここ最近の試合ではなかなかなかったバックステップを効果的に多用でき、特に、レフェリーサイドに広がる際に、ボールから目を離さず、受け手を見ることがスムーズにできた。しっかり監視できたことが、ファウルも少なく、良いゲームに繋がったと感じている。レフェリーサイドと前への意識が強くなりすぎたあまり、ゴールキーパーへのプレスに近づくことができなかった。ゴールキーパーの技術を過信していたところがあったので、次の試合からはポジショニングを修正したい。

〈INS 分析〉

GK が足でボールをコントロールしている時、あるいは最後尾の守備側競技者がボールを保持している時に、相手 FW がボールにチャレンジしに行く事象に危機感を持ったポジションを取って欲しいです。本日は次の展開を予測するあまり、争点から遠い位置で監視していました。また、交代時にアウトする競技者を第 4 の審判員にサポートしてもらう打ち合わせを行うと、競技者を探すことなくスムーズに交代を行うことができます。



12 : 30 試合実践② 高円宮杯 U-18 サッカーリーグ 2025 ブロックリーグ札幌 3 部

北海高等学校 4th vs とわの森三愛高等学校 2nd 主審：高橋陽斗 担当 INS：岡田渉氏

〈自己分析〉

選手と主審の判定の感じ方にギャップが生じないようなコミュニケーションを取ろうとし、結果試合は円滑に進められ試合後選手はやり切った表情で終わることができていたと感じている。しかし、コミュニケーションを取る上でも歩きながら説明しているなど改善する点は多々あったため、今後改善していけるよう努力したい。前半は判定に対して一つ一つ説明していたため、選手からしたら言い訳に聞こえたかもしれない。冷静さを魅せるためにも判定に対して多い説明は不要だと感じ、後半改善することができた。

動きとポジションでは課題が残った。試合中は中から見てることが多く結果的に選手の邪魔となっていた。外を回るだけでなく、縦に進んでしまうなど、チーム戦術に合わせて動きを工夫したい。

〈INS 分析〉

ポジショニングを考える上で、チーム戦術を意識すると良いです。この試合に関して言えば、チームが利用したい中盤での展開時にボールを注視し、また、足を止めている事が多く、プレーの邪魔になっていました。外に回って外側から監視する、縦に抜けてしまっただけで守備側ボランチの後ろに隠れて監視する、などチャレンジしてみてください。

14 : 30 試合実践③ 高円宮杯 U-18 サッカーリーグ 2025 ブロックリーグ札幌 1 部

東海大学付属札幌高等学校 vs 北海道コンサドーレ札幌 U-18 2nd 主審：二谷夢翔 担当 INS：今川一輔氏

〈自己分析〉

23 分ファウルの笛が鳴った後に東海の選手がボールを蹴った。許されない行為であり、警告も考えたが、時間帯や点差などを考慮して注意をした。しかし、笛が弱い、歩きながら寄り添うような形で注意を行う、など主審としての強さを発揮できず、効果的なマネジメントとは言えなかった。予防するという観点も踏まえ、強い笛を用いて、一度しっかり止まらせ話をするべきであったと思う。また、負傷者の対応では疲労からジョギングで選手へ向かってしまい、危機感が欠如していた。選手、ベンチ役員、観客などからの信頼性は低かったと思う。次回以降はすぐに負傷者に駆け寄って対応したい。

〈INS 分析〉

リーダーシップという点において、競技者の用具（ソックスの色・交代選手）や札幌のチーム役員のボール保持など、主審として気づきを持って対応すべきことを怠っているように感じました。第 4 の審判員に全て任せるのではなく、主審が気づいて行動してほしいです。シグナルの美しさ、競技者と対峙する時の二谷さんの落ち着きは、毅然さと冷静さを周囲に印象付ける長所です。これからも大切にしてください。

13 : 00 試合実践④ 2025 年度 第 49 回総理大臣杯 北海道予選 2 回戦

札幌大学 vs 北海道教育大学札幌校 主審：鈴木辰汰 担当 INS：平石暁史氏

〈自己分析〉

点差は開いたものの非常にフェアに両チームとも試合を進めてくれたことは良かったと考える。炎天下のゲームでハーフタイムなどに体に適切なメンテナンスができなかった影響からか、後半の中盤あたりから胃がむかむかし始め脱水症状のような状態になったのは自分の甘さである。次回はなくしたい。

ヘディングの競り合いの判定基準に一貫性がなかった。優先権、ボールに触れたのが先か、身体にぶつかったのが先か、など考慮事項が整理できていないことに気づいた。

〈INS 分析〉

自身のレフェリングにおいて、積極的にチャレンジを重ね、トライ & エラーを通じて課題に向き合おうとする姿勢は、今後の成長に繋がる重要なプロセスといえます。一方で、運動量やスピードの変化、動き出しのタイミング、体の向きなどボールの位置に対するポジショニングと動きにおいては、改善が必要です。①副審と異なる角度で監視する、②ボールと競技者の位置に従って監視する角度と距離を変える。③レフェリースайдへの動き出しを改善する。この3つを次の試合で改善してください。



15 : 30 試合実践⑤ 2025 年度 第 49 回総理大臣杯 北海道予選 2 回戦

北海道医療大学 v s 星槎道都大学 主審：伊藤唯翔

17:45 諸連絡・解散

6月29日（日）

9 : 30 集合

9 : 40 前日の試合の振り返り

10 : 30 講義『レフェリーのためのスポーツ栄養学』

担当：株式会社明治 海老原様 大沼様



本講義では、レフェリーのための栄養学と題し、審判員として必要な栄養素は何か、自分の体で不安視している部分から何を摂取すればよいのかを学び、具体的な献立例を見て自分たちの日頃の食事と比較し、これからどのような栄養素を取るべきかを学んだ。また、特に不足しがちな栄養素の例として「タンパク質」を取り上げ、手軽に摂取できるプロテインについて紹介して頂き最後には試飲をさせて頂くことができた。食事も審判員として非常に大切な要素の一つであるので今回の講義で自分自身の生活を見つめ直すきっかけとなる学びを得ることができた。

12 : 40 講義『「ホールディング」「ヘディングの競り合い」の基本を整理する』

担当：古曾部統太郎氏

本講義では、「ホールディング」と「ヘディングの競り合い」について判定する上で必要な基本事項について参加審判員でディスカッションした後前日の試合で今回の内容に該当する例を用いて分析して

いった。この二つの反則は試合の温度に直結するもので、選手、チーム関係者からしても、また審判員としても非常に大切な部分であるということを念頭に置いて学んでいった。「ホールディング」では選手に影響を与えるということはどういうことかスモールプラクティカル等で学び、反則する競技者の心理状況を読み取る、というところまで考えを深めた。「ヘディングの競り合い」では選手の安全というところを審判員として第一に考えて判定することを改めて再認識する機会となった。

A 競技規則の解釈と適用 ホールディングの反則を判定するときの基本 ・先にどちらが押さえたか ・プレーに影響が出ているかどうか (推進力、スピードが減速した、矢印が変わった、ストレスなど) ・手を監視する ・選手同士の距離が密着している ・アドバンテージを適用後もホールディングを続けた場合、繰り返しの警告もある ・続けさせすぎると、報復(振り払う等)が起こることもある。 ・笛のタイミング(遅くならない) ・横から見る	A 競技規則の解釈と適用 ヘディングの競り合いの反則を判定するときの基本 ・優先権はどちらにあるか ・腕、手を不用にあげていないか ・反則の種類を予期予測(ホールディング、プッシング、トリッピング、打つなど) ・脳震盪の対応を素早く行う ・どちらが先にボールに触ったか ・ボールにチャレンジしているか ・ボールの質(角度、スピード)を考慮する ・競技者の視線(ボールを見ているか、見ていないか) ・横から見る
--	--

13 : 45 英会話&演劇『テーマ「なりきる」』

担当：高等学校教諭 高橋様、佐々木様

本講義では「なりきる」ということをテーマにまずは普段使うことのない英語を使って言葉を、意思を伝える活動を行った。上級の審判員を目指す中でいつかはぶつかる言語の壁にこの段階で体験することができた貴重な経験となった。次に、演劇講座(英語を交えながら)では、身振り手振り表情で言葉を使わずに相手に考えや思いを伝えるという活動を行った。審判を行う中でマネジメントの際に必要なボディランゲージや表情管理を終始和やかな雰囲気の中で学ぶことができた。その中でも、効果的に相手に思いを伝えるためにはどうしたらよいか等を考えながら活動することができこれからの審判活動に必ず活きる活動になった。英語と演劇を同時に学ぶことができる機会はそうあるものではなく、何より楽しみながら学ぶことができた。

15 : 10 解散

